

湘南藤沢学会
2009年度「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」成果報告書

本プログラムの目的

本プロジェクトの目的は、一村一品運動発祥の地、大分県にて、運動の提唱者である平松県知事をはじめ、県内地域リーダーのご講演を拝聴、意見交換することである。さらに、今期の研究成果を発表する機会を設ける。

本プログラムでは、山本研究会のテーマである「連帯経済」の形を大分県一村一品運動に見出し、事例を通して概念を理解することが期待できる。また、実際に運動を推進している一村一品運動グループのリーダーとの接触の中で得られる新たな視点は、各メンバーの研究に大いに役立てられるものと考ええる。さらに、この国内フィールドワークの経験は、今後海外でのフィールドワークを志望するメンバーたちにとって、貴重な学習体験の場となる。

本プログラムの内容

日程

2010年2月5日(金)－2月7日(日)

2月5日(金)

大分県日田市大山町農協が運営する木の花ガルテン見学
大山町農協、矢幡組合長による講演

2月6日(土)

大分県一村一品協会で平松理事の講演⇒一村一品運動についての講義



研究発表会 @コンフォートホテル大分

14:30 城市
15:05 大内田
15:50 山本
16:25 杉山
17:00 総括 (山本先生)
17:30 終了

2月7日は個人研究活動

本プログラムの成果

本プログラムによって、一村一品運動の原点とも言われ、今日でも尚、全国の農協が視察に訪れるほど注目を集めている大山町の取り組みや、一村一品運動全体としての変遷や教訓を、運動の当事者たちから拝聴することができ、現場に行くことで学ぶことの大きさを痛感した。

それらを、地域資源を活用したビジネスとして学問としてとらえると、各事例に共通する発展プロセスが明確化し、さらに、地域資源を活用することによる、地域へのインパクトについて、次のようにまとめることができた。

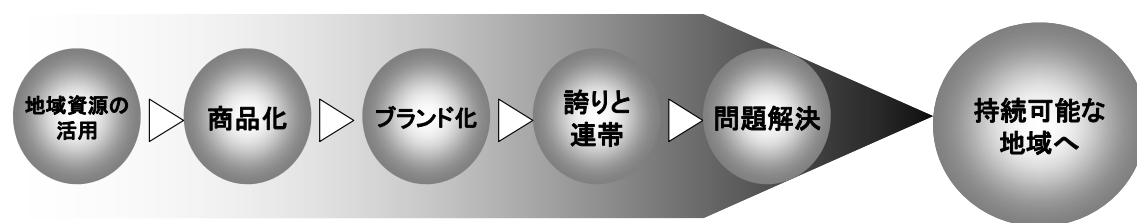
一つ目は、地域資源による産品が、購買（消費）されることによって、生産活動が維持され、生活の安定や向上につながること。

二つ目は、地域の弱みを強みに変えることで、地域が抱える問題が解決されるだけでなく、そこで生まれたものは、受益者にとっての価値も高まること。

そして三つ目が、その産品や地域の認知度が高まる（ブランド化する）ことによって、生産者のみならず、地域住民までもが、地域への誇りや愛着を募らせること。

つまり、大山町や一村一品協会で御紹介いただいた事例は、ものづくりというてこをきかせながら、地域内の既存資源「人・モノ・カネ（・情報）」に対して、付加価値を高めていくことにより、図にあるような発展プロセスを経て、持続可能な地域に近づいていることがわかった。また、これらすべての原点が、人を含む地域資源の活用であることも確認できた。

図 地域ビジネスによる地域の発展段階



(出所) 報告者 作成

今後の課題

これら大分県大山町の事例を中心とした一村一品運動と、山本研究会のテーマである連帯経済をどのように融合させ新しい価値観を生み出せるかについて、研究していくことが有意義だと感じた。

全体としては、それぞれの事例を当たる中で、やはり現場に足を運び、当事者の話に耳を傾けることが、いかに重要かということがわかったので、積極的にフィールドに足を運ぶことを確認した。